或問　WAKUMON　97
No.40,（2021）pp.97-112

佐藤春夫訳『聊斎志異』に関する研究
――固有の言葉の訳し方を中心に

劉　陽

要旨：本稿では中国文学者柴田天馬の全訳、及び中国学者ジャイルズの英訳と比較しながら、近代作家である佐藤春夫が『聊斎志異』を翻訳した際に工夫したところ、特に中国語における固有の言葉の訳し方について検討した。具体的には官名・職名、科挙関連語、歴史人物・典拠という三種類の言葉を取り上げ、佐藤春夫がどのように訳しているか、時期や発表媒体などによる訳し方の変化があるかどうかについて考察した。

キーワード：佐藤春夫、聊斎志異、翻訳、固有の言葉

はじめに

大正期の代表作家として知られる佐藤春夫は、漢詩・漢文学が一般から遠ざかっていくようになった日本の近代においても、中国趣味に執着し続けていた。彼は中国文学に関し、その理解者として明治期と昭和期を結ぶ唯一人の文学者であったと指摘されている[1]。

佐藤春夫の中国に関わる作品は翻訳・翻案小説が圧倒的に多い。臨川書店版『定本佐藤春夫全集』全三十六巻別巻二巻（1998 年 4 月−2001 年 9 月）の内、第二十八巻から第三十四巻（翻訳・翻案 1−7）は翻訳・翻案作品を収録しており、中国文学関係が五割以上を占め、『平妖伝』『水滸伝』などの長編を含め、翻訳・翻案小説は 80 篇に近い[2]。

一方、『聊斎志異』は清朝蒲松齢が創作した、中国では誰にも知られるほど有名な文言怪談小説集である。科挙落第生の蒲松齢は自身の理想を 500 篇近くのストーリーに著した。非現実的な幻想、仙人や妖怪、精霊などの非人間と人間の付き合いを描いており、その奇想天外の想像力が絶賛されている。

佐藤春夫は『聊斎志異』に親しんでおり、その中の 23 篇の作品を翻訳した。本論文では、その翻訳作品の中でも、主に固有の言葉の訳し方に注目し、彼が工夫したところを考察したい。佐藤春夫訳の特徴をより分かりやすく提示するために、昭和 27 年（1952）に完成した、中国文学者柴田天馬による『聊斎志異』の全訳出版（全 10 冊、創元社）と比較しながら考察をする。柴田天馬は、終始「正訳」[3]という姿勢を貫いて、翻訳に臨んでいる。

---

[1] 大内秋子（1971）、「佐藤春夫と支那文学」、『日本文学』（37）

[2] 張文宏（2014）、『佐藤春夫と中国古典―美意識の受容と展開』、和泉書院を参照。

[3] 柴田天馬は自身の翻訳文体を「正訳」と呼び、「正訳というと何か改まった感じがしますが、要は原文を殆ど増減せずに、振仮名の効果を極度に利用し、できるだけ漢音を避け、直訳と意訳を兼ね

佐藤春夫が訳した23篇の作品は、大正11年1922年から昭和26年（1951）年の間に断続的に発表された。発表時期、発表媒体及びレイアウトによって、三期に分けることができると考えられる。第1期は1922年であり、「緑衣の少女」（「恋するものの道」、『現代』、1922年）から「流謫の神」（『文章倶楽部』、1922年）までの5篇が文芸雑誌に発表された。文字が小さくてぎっしりと紙面に詰め込まれている。文字の印刷が薄くなったところもあり、印刷物として多少読みにくいと思われる。また、会話文を改行せず、地の文と続けて書いており、段落が長い。

第2期は1929年から1941年であり、「桃を盗んだ兒」（『東京日日新聞』、1929年1月1日）から「シナノキツネ」（新日本幼年文庫『シナノキツネ:胡養神ノハナシ』、帝国教育会出版部、1941年）までの13篇が少年少女または児童向けの作品として発表された。第1期より、1ページの文字数が少なくなり、文字のサイズが少し大きくてゆったりしたレイアウトである。会話文はすべて改行されており、段落が短い。更にタイトルからも分かるように、第2期の作品は動物に関するものが多い。また、「天から来た男」は第1期の「流謫の神」と同じく、「雷曹」からの翻訳である。「シナノキツネ」は同じく第2期の作品である少年少女向けの「狐」の児童向けに再翻訳されたものである。

第3期は1942年から1951年であり、「よく笑ふ女」（除村一学編『支那文化談叢』、名取書店、1942年）から「顔如玉」（「愛妖記」、『美しい暮しの手帖』（13）、1951年）までの5篇が発表された。文字のサイズは第1期より小さいが、印刷の発展によって、印刷物として読みやすいと考えられる。会話文はすべて改行されていて、段落が短い。また、「顔如玉」は第1期の「書痴」の再翻訳である。本論文は前述の三期を意識しながら、特に官名・職名、科挙関連語、歴史人物・典拠という三種類の言葉に着目し、佐藤春夫がどのように固有の言葉を訳したのかを分析していく。

一方、島田謹二（1968）[4]によると、佐藤春夫は「恋するものの道」及び「流謫の神」の翻訳においては、中国学者ジャイルズの英訳「Miss A-pao; or Perseverance Rewarded」と「The Thunder God」を参照したという。佐藤春夫は当時ジャイルズの英訳が手元にあったと推測でき、英訳も比較対象として取り上げる。

引用する佐藤春夫訳はそれぞれの初出、『青柯亭刻本』は『詳注聊斎志異図詠』（同文書局、1886）、比較対象である柴田天馬全訳は『聊斎志異』（全10冊、創元社、1951-1952年）に拠る。ジャイルズ英訳は『Strange stories from a Chinese studio』（別發洋行、1916）に拠り、それに対する解釈は斎藤秀三郎（1999）『NEW斎藤和英大辞典』（日外アソシエーツ辞書編集部編）を参照しながら解釈する。

た平易な文章にしたものであります」と述べている。（柴田天馬（1951）「序言」、柴田天馬訳『聊斎志異』第1巻「嫦娥之卷」、創元社を参照）

[4] 島田謹二（1968）、「解説」、『佐藤春夫全集第九巻』、講談社

一、官名・職名について

佐藤春夫訳『聊斎志異』では、以下の官名・職名に関する言葉が見られる。

	中国語固有の言葉	青柯亭刻本原文作品名	柴田天馬訳（1951-1952）作品名	ジャイルズ英訳（1916）作品名	佐藤春夫訳作品名（発表時間）	佐藤春夫再翻訳作品名（発表時間）
①	太守	妾太守之女。「宦娘」	妾は太守の女で（後略）「宦娘」	未見	私は或る県令の娘で（後略）「碧色の菊」（1922）	
②	太守	官至太守。「書痴」	太守まで至ったのである（後略）「書痴」	未見	太守であった。「書痴」（1922）	地方長官であった。「顔如玉」（1951）
③	邑宰	聞於邑宰史公。「書痴」	邑宰史公の聞った。「書痴」	未見	遂に市長の史公の耳に入った。「書痴」（1922）	その地の長官史公の耳に入った。「顔如玉」（1951）
④	邑宰	邑宰素仰生才。「嬰寧」	邑宰は素から王の才能を仰ぎ慕って（後略）「嬰寧」	The magistrate happened to be a great admirer of Wang's talent.「Miss Ying-ning, or The Laughing Girl」	郡長さんは王生の才智を敬愛して（後略）「よく笑ふ女」（1942）	
⑤	部郎	邑有林下部郎葛公。喜文士。「宦娘」	邑に林下した部郎(五)で、葛公という、文士の喜きな官人があった。注（五）部郎は尚書のこと、尚	未見	温の故郷の町に葛公という令名のある役人が居て、その人は芸術に対して深い愛好を持っていた。	

			書は大臣相当の官である。林下は役を罷めて故郷に帰臥している人のこと。中国では、役をやめた人に対しても前の官職を称して同じ様に待遇するのを礼儀としている。「宦娘」		「碧色の菊」(1922)	
⑥	方伯	臨邑劉方伯之公子。「宦娘」	臨の邑の劉方伯の公子(後略)「宦娘」	未見	収税史の頭である劉氏の息子(後略)「碧色の菊」(1922)	
⑦	里正	令以責之里正漢書韓延壽傳里正五注若今之郷正也。「促織」	令はまた之を里正に責けた。「促織」	The later, in his turn, ordered the beadles of his district to provide him with crickets;「The Fighting Cricket」	(前略)名主にそれを奉るように命じます。「こほろぎ」(1929)	
⑧	宰	訴於宰。「趙城虎」	宰に訴えると(後略)「趙城虎」	(前略)told her story to the magistrate of the place.「The Tiger of Chao- ch'êng」	県の長官の所に行ってこのことを訴え出ました。「趙城の虎」(1940)	
⑨	國子左廂	業為國子左廂。「翩翩」	大業は國子左廂で(後略)「翩々」	未見	大業は國子左廂の官にいる人で(後略)	

					「山中の女」（1949）	
⑩	直指	後果以直指巡閩。「書痴」	直指の大官で閩を巡視することになった（後略）「書痴」	未見	願い通り閩の地方の巡察官になった。「顔如玉」（1951）	
⑪	王	送我王邸。當得善價。「雒鴿」	王さまのお邸にあたしを送れば、善い價が當得から（後略）「雒鴿」	未見	わたしを華族様のお屋敷へ持って行けばいゝ値に賣れるでしょう。「九官鳥」（1929）	
⑫	巫	巫執故服草薦以往。「阿寶」	そこで、巫が故い服と草薦を執って翁の家に迎ひに往った。「阿寶」	Thereupon a magician proceeded to the house, taking with him an old suit of Sun’s clothes and. some grass matting;「Miss A-pao; or Perseverance Rewarded」	そしてすぐに一人の祈祷師が孫の古い衣服の一つと蓆とを持って商人の家へやって来た。「恋するものの道」（1922）	

柴田天馬は基本的に正訳の理念に基づき、漢字をそのまま使い、意訳の振り仮名を付けている。だが、⑤「部郎」に文末注釈を付けており、⑩「直指」の後ろに「の大官」を加え、官名であることを示している。

佐藤春夫訳を分析する前に、官名に関わる中国の行政区画と日本の違いを確認しなければならない。『聊斎志異』が書かれた清朝は、主な行政区画は省―府―県または省―直隷州―県、という 3 層の行政区から成っていた。また郡が秦朝から第 1 層、第 2 層の行政区画として設置さ

れ、唐代から使われなくなり、明清に府の雅称となった[5]。それに対して、佐藤春夫が『聊斎志異』を訳した当時の日本は府県制であり、郡は府県と町村の中間の地方公共団体として設置されていた[6]。つまり、中国における府は第2層の行政区画であり、日本における郡に近い。そして、「邑」は県の別称であり、第3層の行政区画であり、日本における町村に近いのである[7]。

次に柴田天馬訳及び英訳に見られるものと対照しながら佐藤春夫訳を見てみよう。「太守」という言葉は2篇の原作に見られる。「太守」とは、明清時代の第2層の行政区画である府の長官、知府のことであり[8]、日本の郡長に相当すると言える。

柴田天馬は2つともに漢字をそのまま使っているが、①「太守」に「ちじ（知事）」という振り仮名を付けている。『日本国語大辞典』[9]によると、知事とは第1層の行政区画である、各都、道、府、県を統轄しこれを代表する首長である。明治初年に置かれていた府・藩・県などの代表者としての「知事」が「県令」と改称され、のち再び「知事」と改められ今日に至る。

佐藤春夫は「碧色の菊」（1922）における①「太守」を「県令（けんれい）」と訳し、当時の日本人読者にとって親しみやすい表現であるが、柴田天馬と同じく中国の「府」を第1層の行政区画として扱っているので、適切な訳とは言えない。だが、同じ年の訳である「書痴」（1922）における②「太守」を「太守（たいしゅ）」という当時の読者に馴染まない訳にし、後の「顔如玉」（1951）では「地方長官」と訳している。彼が同じ時期の訳でも、違う訳し方をしたことが見られる。

また「邑宰」も2篇の原作に見られるが、県邑の長官、県令のことであり、知県とも称せられている[10]。柴田天馬は両方の漢字をそのまま保留しているが、それぞれ「けんちじ（県知事）」と「ちじ（知事）」の振り仮名を付けている。英訳では「magistrate」、つまり司法権を持つ行政長官[11]として扱っている。

それに対して、佐藤春夫は「書痴」（1922）に「市長（しちょう）」と訳し、同じ作品を「顔如玉」（1951）に再翻訳した際に「その地の長官」としている。そして、「よく笑ふ女」（1942）では「郡長さん」と訳す、という具合に、すべて違う訳し方である。

⑤「部郎」は中央六部の郎官という[12]。柴田天馬は漢字をそのまま用いており、文末注釈を付け、尚書という大臣に相当する官であることを示し、「しょうしょ（尚書）」の振り仮名を付け加

---

[5] 周振鶴（2010）、『中国历代行政区划的变迁』、中国国際広播出版社を参照。

[6] 総務省「地方自治制度の歴史」、
https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/bunken/history.html を参照。

[7] 財団法人自治体国際化協会編（2007）、『中国の地方行財政制度』（PDF版）

[8] 『漢語大詞典』第二巻下（2003）、世紀出版集団・漢語大詞典出版社を参照。

[9] 『日本国語大辞典』第二版第八巻（2004）、小学館を参照。

[10] 『漢語大詞典』第十巻（2003）、世紀出版集団・漢語大詞典出版社を参照。

[11] Martin Collick など編（2002）、『新和英中辞典』第5版、研究社を参照。

[12] 『漢語大詞典』第十巻（2003）、世紀出版集団・漢語大詞典出版社を参照。

えている。佐藤春夫は「碧色の菊」（1922）に具体的な官名を提示せず、「役人（やくにん）」と簡潔に意訳している。

次に⑥「方伯」は明清時代の布政使であり、明に臨時に総督、巡撫などの大官が地方に派遣された。やがて常設の官となり、制度上は省の長官で、主として財政をつかさどる[13]。柴田天馬は漢字をそのまま使っており、音読みの振り仮名をしている。それに対して、佐藤春夫は「碧色の菊」（1922）で「収税吏（しゅうぜいり）の頭（かしら）」という、役職としての役割を示す簡潔な意訳にしている。

⑦「里正」は中国古代の里長、村長のことを指している[14]。村は県の下に置かれた行政区画の中で最小の単位である村の間の行政区画である[15]。柴田天馬は「里正」の漢字に「むらおさ（村長）」の振り仮名を付けている。ジャイルズの英訳は「beadles of his district」であり、昔の教会の雑務をした教区吏員[16]という意訳である。佐藤春夫は「名主（なぬし）」と訳している。『日本国語大辞典』によると、名主は江戸時代、村方三役の頭である。村政一般をつかさどるむらの長であり、一村の代表者であると同時に、領主の末端行政を担当し、政令の伝達、年貢・諸役の賦課徴収、戸口の管理、農業技術の指導などに当たった[17]。佐藤春夫はこの日本人読者に親しみやすい言葉を選択した。

⑧「宰」は中国古代の地方長官の通称である[18]。柴田天馬は漢字をそのまま使い、④「邑宰」と同じく「ちじ（知事）」の振り仮名を付けている。英訳も④「邑宰」と同じく「magistrate」、司法権を持つ行政長官[19]と訳している。それに対して、佐藤春夫は「県の長官」と訳している。

⑨「國子左廂」は中国における隋代以降、近代以前の最高学府である国子監の学官名である[20]。柴田天馬は原作の漢字を使っているが、振り仮名を付けていない。佐藤春夫は「國子左廂の官」という、官名であることを示している。

⑩「直指」は漢代に設置された、各地を巡察し、政事を処理する官員のことである[21]。柴田天馬は「直指（けんさつ）の大官」という、検察の官として扱っている。佐藤春夫は「巡察官」と訳し、より適切で日本人読者にわかりやすいだろう。

そして、⑪「王」は一般的には一国家、一民族などの最高支配者であり、君主、国王などのことを指すが、中国では、秦漢時代から、皇帝が親族または臣属に授ける最高の爵位のことを意味

---

13 『漢語大詞典』第六巻下（2003）、世紀出版集団・漢語大詞典出版社を参照。

14 『漢語大詞典』第十巻（2003）、世紀出版集団・漢語大詞典出版社を参照。

15 周振鶴（2010）、『中国历代行政区划的变迁』、中国国際広播出版社を参照。

16 Martin Collick など編（2002）、『新和英中辞典』第 5 版、研究社を参照。

17 『日本国語大辞典』第二版第十巻（2004）、小学館を参照。

18 『漢語大詞典』第三巻下（2003）、世紀出版集団・漢語大詞典出版社を参照。

19 Martin Collick など編（2002）、『新和英中辞典』第 5 版、研究社を参照。

20 『漢語大詞典』第三巻上（2003）、世紀出版集団・漢語大詞典出版社を参照。

21 『漢語大詞典』第一巻上（2003）、世紀出版集団・漢語大詞典出版社を参照。

している[22]。柴田天馬が「王さま」という一般的な意味と扱っているが、佐藤春夫は「華族様（かぞくさま）」という、直訳でないが適切な訳し方をしたと言えよう。

最後の⑫「巫」に関して、中国語における巫は、舞を舞って神をおろし、祈って神意をうかがった人を指す。先秦時代からその存在が知られ、漢代になると、女性で神がかりになる者を巫と呼び、男性のそれを覡と呼ぶようになった[23]。柴田天馬は巫の漢字を用い、「みこ」の振り仮名を付けている。日本語におけるみこ（巫女・神子）とは、神に奉仕して、神楽などをする者、また、祈祷を行い、神託を告げたり、口寄などをしたりする者であり、未婚の女性が多いという[24]。英訳は「magician」と訳し、魔術師、妖術師として扱っている[25]。

それに対して、佐藤春夫は「恋するものの道」（1922）では「祈祷師（きとうし）」と訳している。『日本国語大辞典』によると、日本語における「祈祷師」とは祈祷をする僧侶や神官など祈祷者、あるいは、自家に祭壇を設けて、祈祷を行う巫女や行者である[26]。彼の訳は直訳でないものの、意味的には適切であると言えよう。

このように、佐藤春夫は官名・職名を翻訳した際に、直訳ではないが、基本的に日本人読者に親しみやすい適切な言葉を選んだことが見受けられる。なお、「顔如玉」（1951）における②「太守」、③「邑宰」を「地方長官」、「その地の長官」と、「趙城の虎」（1940）における⑧「宰」を「県の長官」と、「山中の女」（1949）における⑨「國子左廂」を「國子左廂の官」と、「顔如玉」（1951）における⑩「直指」を「巡察官」と訳しており、第３期の訳は官名を「長官」または「官」の含むものに訳したことが多いことも窺える。

二、科挙関連語

『聊斎志異』には中国で行われた官吏の登用試験である科挙試験に関する言葉が見られる。

	中国語固有の言葉	青柯亭刻本原文作品名	柴田天馬訳（1951-1952）作品名	ジャイルズ英訳（1916）作品名	佐藤春夫訳作品名（発表時間）	佐藤春夫再翻訳作品名（発表時間）
①	童子業	操童子業。「促織」	たび／＼童子(四)の業（しけん）を操（う）ける（後略） 注(四) 童子の業を操る、とは	a student who had often failed for his bachelor's degree. 「The Fighting	役人（やくにん）になる試験（しけん）を受（う）けるために勉強（べんきょう）していた（後略） 「こほろぎ」	

[22] 『漢語大詞典』第四巻上（2003）、世紀出版集団・漢語大詞典出版社を参照。

[23] 『漢語大詞典』第二巻下（2003）、世紀出版集団・漢語大詞典出版社を参照。

[24] 『日本国語大辞典』第二版第十二巻（2004）、小学館を参照。

[25] 斎藤秀三郎（1999）、『NEW 斎藤和英大辞典』、日外アソシエーツ辞書編集部編を参照。

[26] 『日本国語大辞典』第二版第四巻（2004）、小学館を参照。

			童子の試を受けて生員となることをいう。 「促織」	Cricket」	（1929）	
②	入泮	十四入泮。 「嬰寧」	十四のとき泮(一)に入った。 注(一) 伴(ママ)に入るとは童試に及第して秀才となったということ。 「嬰寧」	（前略）took his bachelor's degree at the age of fourteen. 「Miss Ying-ning, or The Laughing Girl」	十四で官の童子試験に及第した程であった。 「よく笑ふ女」 （1942）	
③	下第	下第歸。 「竹青」	文官試験に落第して、歸って来る途中で（後略） 「竹青」	（前略）when returning home after failure at the examination. 「The Man Who Was Changed into a Crow」	文官試験に落第して歸る時（後略） 「竹青の話」 （1951）	
④	文宗臨試	毎文宗臨試。 「書痴」	文宗が臨て試験をする毎に（後略） 「書痴」	未見	文官試験の地方の豫備試験が行われるごとに（後略） 「顔如玉」 （1951）	
⑤	捷・進士	是年秋捷。次年舉進士。 「書痴」	其の年の秋の試験に捷して舉人になり、次の年の試験で進士に舉げられたのである（後略） 「書痴」	未見	その年の秋の試験に及第して進士になった。 「書痴」 （1922）	その年の秋、地方の豫備試験に及第し、次の年には合格して進士になった。 「顔如玉」 （1951）

①「童子業」は科挙の受験資格である国立学校の学生になるための試験である童子試、童試のことを指している。3年に一回行われ、順に県試・府試・院試の3つの試験を受ける。院試に受かったものは生員となり、秀才と呼ばれる[27]。柴田天馬は「童子の業」と訳し、「業」に「しけん(試験)」の振り仮名を付けた上に、文末注釈を加えている。ジャイルズ英訳は、「bachelor's degree」を学士号として扱っている[28]。それに対して、佐藤春夫は第1期の作品である「こほろぎ」(1929)に、「操童子業」という一文を「役人(やくにん)になる試験(しけん)を受(う)けるために勉強(べんきょう)していた」という、日本人読者に親しみやすい言い方に意訳している。

②「入泮」に関して、古代中国で、学宮の前に泮水があるので、学校を泮宮と呼ばれた。科挙時代に学童が前述国立学校に入学して生員となることは入泮といった[29]。柴田天馬は「泮(はん)に入った」と訳し、文末注釈を付けている。ジャイルズ英訳は①「童子業」と同じく、「bachelor's degree」、つまり学士号と訳している。佐藤春夫は第3期の作品である「よく笑ふ女」(1942)に、「童子試験」という中国語の固有の言葉を含む「官の童子試験に及第した」と訳し、①「童子業」に対する翻訳より直訳に近いと言えよう。

③「下第」とは科挙試験に落第することである[30]。柴田天馬は「文官試験に落第」と訳している。英訳は「failure at the examination」、一般的な試験が不合格になる場合でも使える、落第[31]という言葉を用い、科挙試験という概念に触れていない。佐藤春夫訳「竹青の話」(1951)は柴田天馬訳の前に発表されたが、柴田天馬と同じく「文官試験に落第」と翻訳している。

更に④「文宗臨試」における「文宗」は明清時代の提学、学政のことであり、試官とも尊称された[32]。「臨」は「案臨」であり、試官が訪れて試験を行うことを指している[33]。柴田天馬は「文宗が臨て試験をする」と訳し、「文宗」に「しけんかん(試験官)」という振り仮名を付けている。佐藤春夫は「文官試験の地方の豫備試験が行われる」と翻訳している。

最後⑤「捷」と「進士」は前後の文にあるので、一緒に見てみたい。原作「書痴」で、「捷」は科挙試験に及第することを意味している[34]。また、中国の科挙には三段の試験があり、各省の生員をその首府に集めて行った第一段を郷試といい、郷試に合格すれば挙人の資格を獲得する。次に全国の挙人を北京に集めて第二段の試験、会試を行う。会試に合格した挙人はさらに引続

---

[27] 宮崎市定(2000)、『宮崎市定全集15 科挙』、岩波書店を参照。

[28] 斎藤秀三郎(1999)、『NEW斎藤和英大辞典』、日外アソシエーツ辞書編集部編を参照。

[29] 『漢語大詞典』第一巻下(2003)、世紀出版集団・漢語大詞典出版社を参照。

[30] 『日本国語大辞典』第二版第三巻(2004)、小学館を参照。

[31] 斎藤秀三郎(1999)、『NEW斎藤和英大辞典』、日外アソシエーツ辞書編集部編を参照。

[32] 『漢語大詞典』第六巻下(2003)、世紀出版集団・漢語大詞典出版社を参照。

[33] 『漢語大詞典』第四巻(2003)、世紀出版集団・漢語大詞典出版社を参照。

[34] 『漢語大詞典』第六巻上(2003)、世紀出版集団・漢語大詞典出版社を参照。

き、天子自ら行う第三段の試験殿試に赴き、殿試に及第して、初めて進士の称号を賜わり、高等文官の資格を取得する[35]。原文は「是年秋捷。次年舉進士」であるので、進士の前に及第したのは郷試であり、つまり「是年」に得た資格は挙人であることが推測できる。

柴田天馬は「試験に捷（きゅうだい）して擧人になり、次の年の試験で進士に擧げられた」と訳し、「捷」に「きゅうだい（及第）」の振り仮名を付けており、及第して挙人の資格を得たという内容を補足した。

佐藤春夫は第 1 期の作品である「書痴」（1922）に、原作の二文を「試験（しけん）に及第（きゅうだい）して進士（しんし）になった」という一文にまとめ、正しい訳とは言えない。それに対して、同じ原作を第 3 期の「顔如玉」（1951）に再翻訳された際に、「地方の豫備試験に及第し、次の年には合格して進士になった」すると翻訳しており、科挙の第一段の試験である郷試を「地方の豫備試験」として扱っていることが窺える。佐藤春夫は発表時期によって、訳し方が異なることが分かった。

ここで注目したいのは佐藤春夫の第 3 期の訳に、「官の童子試験」（「よく笑ふ女」）、「文官試験」（竹青の話）、「文官試験の地方の豫備試験」（「顔如玉」）、「地方の豫備試験」（「顔如玉」）というような類似した言葉が見られる。第 3 期の作品には均一性があると言えるだろう。

三、歴史人物・典拠

佐藤春夫訳では以下のような歴史人物・典拠に関する言葉が見られる。

①天師

青柯亭刻本「嬰寧」

後求天師元史釋老傳正一天師者始自漢張道陵其後四代孫曰盛來居信之龍虎山相傳至三十六代孫名宗演當至元十四年世祖巳平江南遣使召之至則待以客禮命主領江南道教仍賜銀印符。

柴田天馬訳「嬰寧」（1952）

後に天師（二三）の符を求って（後略）

注（二三）元史釋老傳に正一天師は漢の張道陵より始まる、其の後四代の孫を盛といい龍虎山に居る、相傳えて三十六代の孫に至り宗演と名づく、至元十四年世祖既に江南を平らぐるに當って使を遣わして之を召す、至れば則ち待つに客禮を以てし、命じて江南の道教を主領せしめ、仍て銀印を賜うとある。

ジャイルズ英訳「Miss Ying-ning, or The Laughing Girl」（1916）

（前略）the Taoist Pope was called in to exorcise it.

---

[35] 宮崎市定（2000）、『宮崎市定全集 15 科挙』、岩波書店を参照。

佐藤春夫訳「よく笑ふ女」(1942)

後に天師（道教の聖者）の符（ごふう）を貰って（後略）

②杜蘭香

青柯亭刻本「葛巾」

但恐杜蘭香墉城仙錄有漁父於湘江洞庭之岸聞兒啼聲視之一二歳女子在岸側舉之至十餘歳天姿奇偉真天人也忽有東靈真人自空而下攜女以去謂漁父曰我仙女杜蘭香也有過被謫今去矣後降張碩家授以舉形飛化之道久之碩仙去漁父亦學道不食後不知所之之下嫁。

柴田天馬訳「葛巾」(1951)

ただ仙女の杜蘭香（とらんこう）(八)が人間に下嫁（よめい）っても（後略）

注(八) 漁父が湘江洞庭の岸で兒の啼き聲を聞き往って見ると一二歳の女の子が岸邊に居た。それを取り擧げて育てたが、十餘りになったとき、東靈真人が空から下りて来て、女をつれて去ってしまった。女は別れに臨み、自分は仙女杜蘭香である。過ちがあって下界に謫せられて居たのである、と漁父に話した。後張碩の家に降って、飛化の道を授けたということが墉城仙錄に書いてある。

佐藤春夫訳「葛巾の話」(1951)

たゞ仙女杜蘭香の嫁いだ話のように（後略）

③卓王孫・長卿

青柯亭刻本「葛巾」

卓王孫當無如長卿何也史記司馬相如傳司馬相如蜀郡成都人也家貧無以自業素與臨邛令王相善於是往舍都亭臨邛令繆為恭敬日往朝相如臨邛中多富人卓王孫家僮八百人程鄭亦數百人二人乃相謂曰令有貴客為具召之酒酣臨邛令前奏琴曰竊聞長卿好之原以自娛是時卓王孫有女文君新寡好音故相如與令以琴心挑之文君從戸窺之心悅而好之夜亡奔相如乃與馳歸家居徒四壁立文君曰第俱如臨邛從昆弟假貸何至自苦如此相如與俱之臨邛酤酒而令文君當爐身自著犢鼻褌與保庸雜作滌器於市中卓王孫聞而恥之為杜門不出。

柴田天馬訳「葛巾」(1951)

手あらいまねはできませんわ。つまり卓王孫（たくおうそん）(一二)は長卿（ちょうけい）を如何（どう）することもできませんの。

注(一二) 富豪卓王孫の娘文君が司馬相如に戀をして二人で逃げたが、金が無くなったので

卓家の前で居酒屋をはじめ、相如は褌一つで樽を洗う、文君はボロを着て酒を温めるという有様なので、卓王孫は恥かしくて耐らず、大金を分けてやった。二人は其の金を持って蜀に行き、相如は大詩人として天子の寵遇を受け、文君は女流詩人として名聲を唱われた。長卿は相如の字である。

佐藤春夫訳「葛巾の話」（1951）

卓王孫が司馬相如と駆落ちした娘の長卿をどうにも出来なかったように、わたしの父だってわたしをどうも出来はしませんわ。

④書癡

青柯亭刻本「嬰寧」

我視郎君。亦書癡唐竇威傳竇氏兄弟皆喜武獨威尚文諸兄詆為書癡。

柴田天馬訳「嬰寧」（1952）

視うけるところ、郎君（わかだんな）は書痴（ほんむし）のようじゃ。

ジャイルズ英訳「Miss Ying-ning, or The Laughing Girl」（1916）

I am afraid you are an unpractical gentleman.

佐藤春夫訳「よく笑ふ女」（1942）

お見うけ申したところあなたも書痴（勉強がすぎて間の抜けたお仲間）ですね。

⑤禹歩

青柯亭刻本「雨銭」

禹歩史記帝王世紀禹治水手足胼胝故世傳禹病偏枯足不相過今巫傳禹歩是也作咒。

柴田天馬訳「雨銭」（1952）

禹歩（まじないをし）作咒(二)た。

注(二) 禹はながい間治水に努力した為め手足にあかぎれが出来、びっこの様な歩き方をしていたというので、斗を踏んでまじないをする時の變な歩きつきを禹歩というのである。こゝでは禹歩作咒をまじないをしたと譯しておく。

佐藤春夫訳「狐」（1929）

（前略）跛を引くような歩き方で、その中を歩きまわりながら咒文を唱えるのでした。

佐藤春夫再翻訳「シナノキツネ」（1941）

（前略）ビツコヲ　ヒクヤウナ　フシギナヘンナ　アルキカタデ　ヘヤノ　ナカヲ　クルクル　アルキマハリナガラ、クチデハ　タエズ　ナニヤラ　ワカラナイ　マジナヒヲ　トナエテ　ヰマシタ。

⑥梁上君子

青柯亭刻本「雨銭」

只合尋梁上君子後漢陳實傳實字仲弓為太邱長有盗夜入其室伏梁上實隱見乃起自整拂呼命子孫正色訓之曰夫人不可不自勉不善之人未必本惡習以成性遂至於此梁上君子者是也盗大慙降地實曰子貌非惡人當貧耳遺絹三疋而遣之交好方得。

柴田天馬訳「雨銭」（1952）

梁上君子(四)を尋して交好たら方得じゃ合。

注(四) 飢饉の年であった。ある夜盗賊が陳寔の家に忍びこみ、梁の上に乗っているのを覚った寔は、子供たちを呼び、人は勉めねばならん、不善を為す人でも本から悪人ではなく、習い性となって悪いことをするのだ、梁上の君子もそうである、といったので、盗賊は驚いて謝罪をした。すると寔は、君は悪人とは見えん、貧困のためだろう、といって二匹の絹を與えた。それから盗賊を梁上の君子と呼ぶようになったのである。

佐藤春夫訳「狐」（1929）

あなたは梁の上の君子（泥坊のこと）と御交際をなさったがよろしかろう。

佐藤春夫再翻訳「シナノキツネ」（1941）

アナタハ　ドロボウト　オトモダチニ　ナレバ　ヨカツタノデセウニ。

青柯亭刻本『聊斎志異』は前述歴史人物・典拠の直後に詳細な注釈が付けている。柴田天馬は④「書癡」以外、青柯亭刻本と同じく長い注釈を付け加えており、文の流れと言葉遣いから見れば、ほぼ青柯亭刻本の注釈からの直訳であることが見受けられる。次に英訳とも対照しながら見てみよう。

青柯亭刻本『聊斎志異』の注釈によると、①「天師」は中国後漢末の正一道の創始者である張道陵及びその子孫に対する尊称である。柴田天馬は天師の漢字を用い、文末注釈を付け加えて

いる。ジャイルズは①「天師」を「Taoist Pope」、つまり道教の最高権威とみなされる人として扱っている[36]。佐藤春夫は「天師（道教の聖者）」というように、括弧付きの簡潔な注釈を付けている。

②「杜蘭香」は中国神話に登場する仙女である。柴田天馬は「仙女の杜蘭香（とらんこう）」というように、杜蘭香が仙女であることを示した上で、文末注釈を付けている。佐藤春夫は「仙女杜蘭香」と訳し、柴田天馬と同じく仙女であることを補足したが、この人物に関する詳しい情報を提示していない。

③「卓王孫」と「長卿」は歴史人物である。長卿は中国前漢の文人である司馬相如の字であり、卓王孫は司馬相如の妻である卓文君の父である。柴田天馬は卓王孫の後ろに青柯亭刻本『聊斎志異』に基づいた文末注釈をつけており、二人の関係を説明した。それに対して、柴田天馬は「葛巾の話」（1951）に「卓王孫が司馬相如と駆落ちした娘の長卿」と訳し、「長卿」を司馬相如の妻として捉えており、誤訳であると言えよう。

④「書癡」とは、読書ばかりして、他を顧みない人を悪く言う言葉である[37]。柴田天馬は漢字をそのまま使い、日本語における本ばかり読んでいる人を指す[38]「ほんむし（本虫）」の振り仮名を付けている。英訳は「unpractical gentleman」という、実際的技術のない紳士[39]と訳している。一方で、佐藤春夫は「よく笑ふ女」（1942）に、「書痴（勉強がすぎて間の抜けたお仲間）」というように、前述①「天師」と同じく、括弧付きのわかりやすい説明を付け加えている。

そして⑤「禹歩」と⑥「梁上君子」はともに『聊斎志異』「雨銭」に見られる言葉なので、合わせて見てみたい。まず⑤「禹歩」中国の伝説的帝王である禹の歩き方を指す。柴田天馬は漢字をそのまま用い、青柯亭刻本『聊斎志異』にそった文末注釈を付けているが、「まじない（呪い）」の振り仮名を付けて意訳している。佐藤春夫は「狐」（1929）に「跛（びっこ）を引（ひ）くような歩（ある）き方（かた）」というように禹の歩き方を具体化にしており、同じ原作「雨銭」を「シナノキツネ」（1941）に再翻訳する際に「ビツコヲ　ヒクヤウナ　フシギナヘンナ　アルキカタ」というにカタカタの形式に変換した。

⑥「梁上君子」は盗賊、泥棒のことであり、後漢の陳實が梁の上に忍び込んでいる盗賊を見つけて、悪い習慣が身につくとあの梁の上の君子のようになるのだと子供たちを戒めたという故事による。柴田天馬は「梁上君子」に「どろぼう（泥棒）」の振り仮名と文末注釈を付けている。佐藤春夫は「狐」（1929）に「梁（はり）の上（うえ）の君子（くんし）（泥坊（どろぼう）のこと）」というように、括弧付きの解釈を付けているが、「シナノキツネ」（1941）に直接「ドロボウ」と訳している。

---

36 斎藤秀三郎（1999）、『NEW 斎藤和英大辞典』、日外アソシエーツ辞書編集部編を参照。

37 『漢語大詞典』第五巻上（2003）、世紀出版集団・漢語大詞典出版社を参照。

38 『日本国語大辞典』第二版第十二巻（2004）、小学館を参照。

39 斎藤秀三郎（1999）、『NEW 斎藤和英大辞典』、日外アソシエーツ辞書編集部編を参照。

ここで注目したいのは、「狐」が収録されている『支那童話集』（アルス、1929）の「はしがき」によって、この本の読者層は「少年少女たち」であるのに対して、「シナノキツネ」の前に「お母さんがたへ」という序言が付けられており、読者層はまだ読解力のないより幼い子であることが窺える。そこで、佐藤春夫は幼い子に対してはより簡単な言葉遣いを選んでいたということが推測できる。

前述のように、佐藤春夫は中国語における固有の言葉を翻訳した際に、誤訳したところがあるものの、基本的に日本人読者に親しみやすい適切な言葉を選んだことが見受けられる。彼は幼い子に対してより簡単な言葉遣いを選んでいるなど、発表時期や発表媒体、読者層によって訳し方を調整している。なお、第 1 期と第 2 期における固有の言葉の翻訳は均質ではないが、第 3 期の作品に類似した言葉が見られ、言葉遣いに均一性があると考えられる。

おわりに

近代作家である佐藤春夫は『聊斎志異』における 23 篇の作品を翻訳した。その翻訳は発表時期、発表媒体及びレイアウトによって、三期に分けることができる。本論文では、この三時期を意識し、柴田天馬全訳及びジャイルズ英訳と比較しながら、主に官名・職名、科挙関連語、歴史人物・典拠という三種類の言葉から、佐藤春夫訳『聊斎志異』における固有の言葉の訳し方について考察した。

柴田天馬は基本的に正訳の理念に基づき、漢字をそのまま使い、振り仮名に工夫をしており、ジャイルズ英訳は意訳したところが多い。それに対して、佐藤春夫は中国語における固有の言葉を翻訳した際に、基本的に日本人読者に親しみやすい適切な言葉を選んでおり、発表時期や発表媒体、読者層によって訳し方を調整していることが見受けられる。更に、第 1 期と第 2 期における固有の言葉の翻訳は均質ではないが、第 3 期の作品は類似した言葉が繰り返し用いられており、言葉遣いに均一性が見られるという佐藤春夫の訳し方に変化があったことを明らかにした。